

こぐまのともだち

for Members of KOGUMA no TOMODACHI Circle

巻頭エッセイ
磯崎園子
春の新作
よるがやってくる
連載漫画
バクさん 馬場のぼる



©Kayako Nishimaki



特集

こぐまちゃんの作者

わかやまけんの

夢みたものは

No. 80
2021 Spring

こぐま社

KOGUMA 掲示版



只今準備中！
楽しみに
待っててね～



©Ken Wakayama

こぐまちゃんとしろくまちゃん
絵本作家・
わかやまけんの世界

2021.7.22(木) → 8.2(月) (有料)

◎ ジェイアール名古屋タカシマヤ (愛知)

没後6年にして初めての、わかやまけんの仕事を網羅する展覧会。こぐまちゃんだけでない著者の魅力に触られます。

没後20年
まるごと馬場のぼる展
描いたつくった楽しんだニャゴ！

2021.7.25(日) → 9.12(日) (有料)

◎ 練馬区立美術館 (東京) その後全国を巡回予定

「11ぴきのねこ」を中心に、その他の絵本や昭和の漫画原画、50年間描きためたスケッチブック等、馬場のぼるの全てをお見せします。



©Noboru Baba

巡回 information

◇2021.11.27(土) → 2022.1.23(日)

◎ 北九州市立美術館分館 (福岡)

◇2022.3.19(土) → 2022.5.15(日)

◎ ひろしま美術館 (広島)

◇2022.7.2(土) → 2022.9.4(日)

◎ 世田谷美術館 (東京)

『かみさまからのおくりもの』 原画展・講演会

2021.3.19(金) → 4.14(水) (無料)

◎ ポップ絵本館ギャラリー (和歌山)

(問) 有田川町地域交流センター(ALEC) ☎ 0737-52-4730

人は誰でも、生まれてくる時に“個性”という神様からの贈り物を受け取る——そんな大切なメッセージが込められたロングセラー絵本『かみさまからのおくりもの』の原画展が、和歌山県有田川町で開催されます。貼り絵で描かれた貴重な原画をぜひご覧ください。3/21(日)には、作者ひぐちみちこさんの講演会と手作り絵本のワークショップも予定されています。詳しくは、有田川町までお問い合わせください。



©Michiko Higuchi

◎吉祥寺ロフト
2021.2.16 → 3.14

11ぴきのねこ
POP
UP
SHOP

2021.4.14 → 4.27
◎そごう大宮店



株式会社

こぐま社

〒112-0014 東京都文京区関口1-23-6 TEL:03-6228-1877 FAX:03-6228-1875

ホームページ → <https://www.kogumasha.co.jp>

わかやまけんの夢みたものは

ラオスの子どもたちに絵本を！

文Ⅱ編集部 関谷裕子



◆ラオスの絵本の原点にわかやまけんさんが

色鮮やかな果物が登場する「数字の本」、ワニや水牛、極彩色の鳥たちが描かれた「文字の本」。ラオスで出版されたこれらの絵本は、二十五年前、「こぐまちゃんえほん」の作者・わかやまけんさんがラオスのピエンチャンで行った「創作絵本セミナー」から生まれました。ベトナムとタイに挟まれた東南アジアの国ラオスは、当時も今も社会主義政権下。絵本はおろか、教科書さえないような状況でしたが、わかやまさんは、一九九五年三月、「ラオスの子どもに絵本を送る会」に

日したチャンタソンさんが始めたものです。現在は、国際NGO「ラオスのこども」として、ラオスの子どもたちの教育環境の向上を願って、日本事務所および現地ラオスはピエンチャンの事務所を中心に活動を続けています。



『こぐまちゃんおやすみ』を読む現地スタッフと子ども

◆子育ての中で知った絵本の大事さ

留学生として来日し、日本人と結婚したチャンタソンさんは、子どもにも恵まれ、幸せな日々を送っていました。そして我が子に絵本の読み聞かせなどをするうちに、子どもにとっての「本」という存在の大きさに気づいていきます。しかし振り返れば、母国ラオスでは、子どもの本はほとんど存在せず、しかもチャンタソンさんの子ども時代には、



請われ、絵本作家のやべみつのりさん、会の代表を務める日本在住のラオス人女性、チャンタソン・インタヴォンさんと共に、たくさんの画材を持って一路ラオスに向かいました。このセミナーを企画した「ラオスの子どもに絵本を送る会」は、一九七〇年代に留学生として来



初等教育はフランス語でした。母国語で教育を受けることの尊さ、子どもの時から母国語で本を楽しむことの大事さについて、友人たちに呼びかけ、家庭で読まなくなった絵本を寄贈してもらい、ラオスの子どもにも送る活動を始めます。

さらにチャンタソンさんには、もう一つの強い思いがありました。当時はインドシナ半島の政情不安から、危険を冒して国外脱出を計るインドシナ難民が絶えませんでした。難民支援のボランティア活動なども生まれていましたが、チャンタソンさんは、そもそも難民を出さないような国づくりが大切で、その根幹が教育であり、学ぶ力を育てることであり、それを支えるのが「本」なのだ、この活動にさらに力を入れていきました。

かくラオスに送るのでしたら、玉石混交ではなく質の高い絵本を選んで送る必要があります。そこで、チャンタソンさんは、当時絵本

に関わる仕事をしていた人に、選書の協力をお願いしました。その中のお一人が「こぐまちゃんえほん」の作者わかやまけんさんだったのです。「絵本を送る会」では、まだこの頃は、送付する絵本にラオス語訳をつけるまでにはなっておらず、日本語のまま送っていたので、絵が話している絵本、絵を見ただけで楽しくなるような絵本をという観点で絵本を選んでいました。

一方わかやまさんは、それ以前から「絵が語る絵本こそが絵本（純絵本）」との自論を持ち、「こぐまちゃんえほん」でも全ての場面で主人公が何を

しているかが分かるようにと心がけて絵を描いておられました。そんな



何をしているところが分かるように……。

◆質の高い、絵が語る

新聞にその活動が紹介されたこともあって、志に共鳴した人々から大量の絵本が「絵本を送る会」に寄贈されてくるようになりましたが、せつ

「日本から絵本を送るだけでなく、ラオス語の絵本を作りたいのです。ラオスに行って、ラオスの人たちに絵本の作り方を教えてください」と依頼されるようになりました。

◆「絵本作りを

ラオスで教えてください」

こんなふうに出会ったチャンタソンさんとわかやまさんでしたが、話をするうちにチャンタソンさんから「日本から絵本を送るだけでなく、ラオス語の絵本を作りたいのです。ラオスに行って、ラオスの人たちに絵本の作り方を教えてください」と依頼されるようになりました。絵本作家としての創作活動だけでなく、地元練馬区で図書館の新設運動の中心になったり、絵本作家を目指す若者を育てる学校で教えたりと、わかやまさんは、絵本の楽しさを広めるために地道な活動をなさっていました。ですから、ラオスの子

どもたちへ絵本の楽しさを届ける活動にも真つ直ぐに心が動いていたのかもしれない。

さて、それから数年は資金集めに時間を要しましたが、一九九五年、ついにわかやまさんと、同じく絵本作家のやべみつのりさんは、チャンタソンさんたちと共に、絵本作りの専門家派遣セミナーの一環として、ラオスの首都ビエンチャンへと旅立つことができました。



左から、やべさん、わかやまさん、チャンタソンさん（1995年）

◆「こぐまちゃん」が待っていた！
やべさんからうかがったことですが、現地に着いたとき、ピエンチャン事務所の壁には、子どもたちが描いた絵が貼られていて、その中には作者の到着を待つようにこぐまちゃんの絵もあったとか。わかやまさんは、すでに日本の

がそれぞれに、「数字の絵本」と「文字の絵本」を作ることになりました。大判の厚紙を十センチ四方に切って、画材は水彩とクレヨン。絵具の使い方、色の混ぜ方から指導する場面もありました。数字の絵本は、日本から持参した色紙を切り、貼り絵方式で作られました。各自が手作り絵本を一冊ずつ作り、発表しあいました。参加者が持ち帰った絵本は、自分の生徒たちにとどんなに喜ばれたことでしょう。帰国後、わかやまさんは会の会報に、興奮覚めやらないトーンでこんなふうに書かれています。
絵というものは、美術教育を受けなくても描けるものと思っただけだが、数日しか時間が無い。しかし制作されてきた三十冊近い十センチ×十センチの「ラオスで初めて制作された近代絵本」は見事なものだった。画期的な色彩と構成と造形の演出だった。「ラオスの若い人が作ってラオスの子どもに贈られるラオスの絵本」の出現だった。喜ばしいことだ。



ワークショップでできた手作り絵本を見つめる。

子どもたちには人氣者となっていた

「こぐまちゃんえほん」をラオスに寄贈して



ピエンチャンでは、こぐまちゃんの絵が迎えてくれた。

いらしたようです。先発隊の(?)こぐまちゃんたちは、すでに子どもたちとお友だちになっていたのでしよう。なんだかこちらもうれしくなるエピソードでした。

◆「色を使って

描いたことがなくて…」

このセミナーは国の情報文化省が主催する形で行われ、事前に「日本から絵本作家を招いて絵本づくり、手作りおもちゃのセミナーをやりませう」と告知して、人集めをしておいてもらいました。そして集まったのは、幼稚園から高校までの教員が主、出版を目指す人も少しいて、全体で三十人ほど。ところがいざ始めようとすると、「今日の今日まで絵具や色鉛筆を手にしたことがない」という先生の中にはいらしたのだそうです。

当時のラオスでは、絵本はおろか、教科書さえ子どもに行き渡っていないので、学校では先生が黒板

◆ラオス初の近代的絵本出版

このときの手作り絵本を土台に、後日、日本に帰ってから三冊の絵本が出版物として生まれました。それが、冒頭の本です。

「数字の絵本」は一人の作者の絵で制作されました。「文字の絵本」(あいうえおの絵本のようなもの)二冊は、改めてセミナー参加者に絵を募集して作られました。ラオスの作家ドゥアン・ウアンさんにわかりやすくリズムカルな短文を書いてもらい、それに絵をつける形です。

そして集まった絵を、わかやまさんたちが選考、添削指導をし、日本人デザイナーの手も借りて、一九九七年、三種類合計一万五千冊の絵本ができあがりました。印刷こそタイで行われましたが、完成した絵本は、色鮮やかでデザイン性が高く、ラオスでは画期的な絵本となりました。教育関係者からも「過去のラオスの児童書の中で最も高い水準にある」と声が上がりました。

「文字の絵本」は続編の三冊目も絵を公募して出版され、そのときもわかやまさんは、構図の例としてラフスケッチを描いたり、原画は本よりも大きめに描くと描きやすいことをアドバイスしたりして、描き手を励まし続けました。

に字を書き、生徒は自分の小さな黒板にそれを真似して字を書くといった勉強の風景が普通でした。当然、学校で絵を描く授業はなく、従って先生方も絵を描いたことなどない人が多かったのです。

◆お母さんのことばのように

セミナーの初日は、わかやまさんの「子どもが初めて出会う絵本」という題の講演から始まりました。その講演が素晴らしくて感激したと、同席したやべみつのりさんはおっしゃいます。

「絵本の原点は、お母さんが赤ちゃんに話しかけることばです。赤ちゃんはお母さんの心地よい響きのことばを耳にして健やかに育ちます。そういう心構えて絵本を作りませう」

わかやまさんはそう語りかけました。それまでラオスの子ども向けの本は、大人が子どもを教え諭すという視点で作られていたので、このお話は集まった先生方にとって貴重な体験となったようです。

この講演の後、セミナーは、「絵本を作る」わかやまクラスと、「おもちゃを作る」やべクラスに分かれ、四日間の日程で行われました。

◆「数字の絵本」と「文字の絵本」

わかやまクラスでは、各参加者



三冊目の「文字の絵本」のためのラフスケッチ例

◆四半世紀後も生きる「夢の形見」

最初の文字の絵本一、二は、六刷まで重版され、出版後四半世紀以上たった今では、多くの子どもたちが、学校や図書館でこの絵本と一度は出会って成長しています。今、「ラオスのこども」では、七回目の重版のために募金活動をしています。ラオスの子どもたちの、本の世界への入口となったこれらの絵本は、絵本の楽しさを少しでも多くの人に伝えたいというわかやまさんの、「夢の形見」の一つだったのかもしれない。

認定NPO「ラオスのこども」を
寄付でお支えください。詳細は会の
HPをご覧ください。
☎03(3755)1603

この夏、わかやまさんの大規模な展覧会「こぐまちゃんとしろくまちゃん 絵本作家・わかやまけんの世界」が名古屋タカシマヤで七月二十二日(木)～八月二日(月)まで開催され、その後、全国を巡回します。詳細は、本誌最終ページをご覧ください。